

平成 26 年度 第 2 回新潟市花育推進委員会 会議速報

日 時	平成 27 年 2 月 13 日(金) 午前 10 時～12 時
会 場	新潟市食育・花育センター講座室 A
出席委員	石井委員、石川委員、伊藤委員、小川委員、関委員、高橋委員、竹内委員、森田委員
欠席委員	片岡委員、玉木委員
傍聴者	なし
事務局	松宮農林水産部長 食育・花育センター(大谷所長、木村所長補佐、田中技師、早川職員) 環境政策課(堀之内技師) 保育課(塚田課長補佐) 食と花の推進課(小林主幹) 公園水辺課(高橋技師)

概要

(1) 第 2 次花育推進計画について

(事務局説明)

【資料 1】を基に説明

(主なご意見等)

- ・ 第 1 次花育推進計画は初めてのことであったため、範囲や定義が曖昧だった。第 2 次については必要な部分を精査して強調していく。
- ・ 19 ページの「5.全ての園児・児童が参加している保育所、幼稚園、小学校の割合」は目標を大きく下回った。数値は学校へのアンケート結果である。学校の年間計画に組み入れられていないことが要因と思われるが、今後は地域教育コーディネーターや花育マスター、地域の団体と連携して強化していく必要がある。
- ・ 学校は年間カリキュラムに入れないと難しく、また長続きしない。授業時数の確保という観点から見ると、低学年では比較的たやすいが、高学年では難しい。いくら良い内容でも限界がある。
- ・ 総合や生活科の授業で時間が取ればベストだが難しい。休み時間を利用すれば実現可能では。また、予算的な問題は地域コミュニティ協議会等と共に負担することもできるのでは。
- ・ 学校で花育活動を行うことは地域のコミュニケーションに大きな効果がある。
- ・ 委員会レベルなら休み時間も活用できるが、人数の規模が大きいと休み時間内では難しい。
- ・ 学校が何らかの形で取り組んだものは、規模を問わずカウントしていくべきでは。
- ・ アンケートは答えやすいように工夫すべき。学校側を迷わせないように。
- ・ 園・小学校だけでなく、中学校も含んでいくべきでは。

→第2次では、「学校」というくくりで設定する。

- 新しい「団体体験プログラム集」の内容を見ると、保護者目線で非常に魅力的である。学校や PTA 側に積極的にアプローチすべき。
- 第2次は22ページにあるとおり、上位計画である「新潟市農業構想」と、平成26年6月に公布された新法「花きの振興に関する法律」とともに連動し、策定する。
- 「花によるまちづくり、人づくり」の文言を取り入れる。
- まち歩きをやってほしい。
- 民間で花育活動をしている団体もたくさんある。それらの発表や交流の場を用意していくことが必要。支援のひとつの形となる。その際は、「課」というくくりを超えて行うことが必要。
- 福祉を中心とした、花を介しての地域のつながりも今後はもっと増えていく。
- セイタカアワダチソウなどの外来種の繁殖がすさまじい。地域毎の駆除では限界があるので、「花や緑に親しむ場の整備」という面からもなんとかできないか。

→新潟市全体として取り組む問題であり、花育の部門で対策を行うのは難しい。講座や花育プログラムの中で啓蒙活動することは可能。